

子どものきょうだい関係についての認知と社会的適応

林 聖子

I 問題と目的

子どもは生まれてからしばらくは親の庇護のもとで成長していく。しかし、いつまでも親との関係の中だけで生活していくわけではない。多くの子どもは幼稚園や保育園生活を経験し、義務教育である小・中学校へすすみ、その後いくらかの違いはあるとしても、最終的には社会の一員として生活していくわけである。そうした際に必要なものが子ども間の相互作用のなかで育まれる。すなわち、子ども間の相互作用が子どもの社会性の発達・認知発達・道徳性の発達といったものに特別な意味を持ってくるのである。

そして、子ども同士の関係について考えた場合に、大きな意味では仲間関係ときょうだい関係は似たような意味をもっているかも知れないが、実際には、さまざまな点で異なってくる。まず第一に仲間・友達を選択できるがきょうだいは選択できない。第二に愛着という、子ども自身の存在をかけた競争関係の有無、第三にカインコンプレックスという言葉もあるように、きょうだい関係と仲間関係での質の違い、第四に子ども同士の年齢差、などといったものが両者の違いとしてあげることができる。

このような違いをふまえ、小嶋(1989)は、きょうだい関係を、タテの関係である親子関係やヨコの関係である仲間関係と比して、ナナメの関係としてとらえ、さらに、依田(1990)はきょうだい関係について、親子関係と仲間関係を結ぶ橋渡しの役割があることを示した。

親子関係からきょうだい関係へ、そして、きょうだい関係から仲間関係への移り変わり、あるいは、家庭の中から家庭の外へと広がっていく子どもの対人関係については、きょうだい関係が、直接、子どもが仲間との関係を築いた場合の原因になるという研究結果は得られていない。最近の研究では、きょうだい形成的役割を果たしているものとして、攻撃的な行動・自尊心・内在化と外在化の問題が主に取り上げられているが、その中できょうだいは、それぞれの結果の原因と仮定されてはならず、それよりもむしろ子どもの問題行動についての指標になるのではないかと考えられている(Dunn, 1992)。

そこで、本研究では、きょうだい関係の中でもどのようなものが子どもの社会的適応についての指標となるのか検討することを目的とし、そのために、研究1では、きょうだい関係を構成している要素とそれらの要素に影響する要因の検討を行ない、そして、研究2では研究1で導かれたきょうだい関係構成要素のうち、どの要素が子どもの社会的適応の指標になるかについて検討することにした。

II 方法

被験者は小学校5・6年生の男女(男子261人・女子224人・計485人)で、質問紙法による調査が実施された。質問紙はBuhrmesterら(Buhrmester & Furman, 1987, 1991)によるSibling Relationship Questionnaire(SRQ)を使用して、子どものきょうだい関係についての認知を調査した。また、子どもの社会的適応についてはY-G性格検査の社会的適応をみる項目(攻撃性・協調性・客観性)を使用した。

また、調査に回答するにあたって初めに、子どもの家族構成、本人の学年・年齢・生まれ月・性別、きょうだい構成についての回答欄のほか、今回調査の対象となるきょうだいの学年・年齢・生まれ月・性別についての回答欄を設けた。きょうだい構成の回答欄に加えて、改めてこの回答欄を設けた目的は、その後の質問できょうだいについて言及している部分が、下線部のみの空白になっており、複数のきょうだいを持っている児童が、質問に回答するのに、誰について回答するのかということについての混乱を防ぐため、改めて1人のきょうだいを選んでおくことで、同一のきょうだいについて一貫して回答しやすくなると判断したためである。

きょうだい関係について検討するにあたって、ある程度、きょうだいとの相互作用が保証されるように、分析対象者は、自分と一番年齢の近いきょうだいを考えた場合に、そのきょうだいと自分との年齢差が4歳以内(36ヶ月以内)である子ども(男子187人・女子175人)とした。きょうだいとの年齢差が4歳以上の子どもと、きょうだいのいないひとりっちは分析対象とはしなかった。

Ⅲ 結果

(1) きょうだい関係を構成している要素とそれらに影響する要因の検討

SRQ全38項目について、主因子法・バリマックス回転を行なった結果、以下のような因子構造がみられ、それぞれに影響する要因を分散分析によって検討した。

①調和・相互協同

きょうだい関係のポジティブな、あたたかい関係の側面をあらわしている。この側面は本人の性が女子であるときに、きょうだいに対し、強く認知されるようである。また、本人の性が女子である場合も、男子である場合も、きょうだいが自分と同性である場合に調和的で相互協同的な認知をするようである。きょうだいの組み合わせでは、姉-妹の組み合わせが特にこのような認知をしやすい傾向があることが認められた。

②支配欲求

きょうだいとの勢力の張り合い、力の強弱についてあらわしている。この側面では、本人が女子であるほうがきょうだいと対抗しようというきもちを強く持っていることが分かった。また、出生順位が早い兄・姉のほうが弟・妹よりも強い力を持っていることが認められた。

③被支配

きょうだいから指示される、命令されるといった、勢力的にきょうだいよりも劣勢である側面をあらわしている。この側面は、出生順位によって認知が変わってくるということが認められた。

④親の偏好

自分ときょうだい、どちらが父・母に好かれているか、世話をしてもらっているかについての子どもの認知である。この側面は、出生順位によって、認知の違いのあることが認められた。

(2) 子どもの社会的適応についての指標

(1)でみとめられたきょうだい関係を構成している要素のうち、調和・相互協同、支配欲求、被支配の因子について、子どもの社会的適応に対する影響を検討した。その結果、支配欲求の因子と被支配の因子で子どもの社会的

適応について、影響力を持っていることが認められた。調和・相互協同の因子と親の偏好の因子は子どもの社会的適応について、影響力を持っていないことが認められた。攻撃性、協調性、客観性のそれぞれについては分析しなかった。

Ⅳ 考察

今回の研究では、きょうだいとの関係の中で、きょうだいよりも優位な勢力関係でいようとする支配欲求や、きょうだいよりも弱い立場にいるとする被支配の認知をしている子どもが、社会的不適応を起こしやすい傾向にあることが分かった。Lewisら (Lewis, Hyman, Betsy & Dishion, 1993) の研究で、きょうだいに対し攻撃的な子どもは、仲間から拒否される傾向があるという報告がされている。本研究の場合では、きょうだいに対し、攻撃的であったり支配的である子どもが、家庭外の場面で、攻撃性が強かったり、協調性がなかったり、客観性がなかったりといった傾向が認められ、その結果として、仲間から拒否される可能性も高いと考えられる。

また、Dunnら (Dunn & Plomin, 1990) は、子どもは、自分がうけた以上のネガティブな行動を相手のきょうだいに与えたときに快い感情を持つという報告をしている。この研究から本研究について考えると、被支配の認知をしている子どもが社会的不適応を起こしやすいという結果は、自分が相手よりもネガティブな行動を与えられていると認知する子どもは、快い感情を持つことができず、社会的に不適応となりやすいパーソナリティーとなる可能性が考えられるだろう。また、Dunnらの研究から、きょうだいがお互いに支配しようと競争するきょうだい同士の葛藤は、不可避的なものとも考えられ、そのような葛藤に対し、両親や子どもがどのように対処するかということが、子どものきょうだい関係に対する認知、子どものパーソナリティーや社会的適応、ひいては仲間関係まで、大きな影響力を及ぼし、きょうだい関係内の支配・被支配、競争関係は社会的適応を見る一つの指標となりうると考えられた。